

那珂市の未来をつくる 「道の駅」

基本設計の
舞台裏

問 道の駅整備課 ☎ 029-298-1111

令和10年秋の開業を目指して進む道の駅整備。地域のランドマークとなる施設の設計を手がけるのは、現代建築と自然との調和をテーマとした建築設計を行うことで知られ、国内外から高い評価を受けている建築家・建築史家の藤森照信氏。

人の流れ、風景との調和、そして地域の誇りを形にするために一。

まちの未来を形にする、新たな拠点が動き出しています。



藤森 照信氏

昭和21年、長野県に生まれ育ち、東北大学で建築を、東京大学大学院で建築史を学ぶ。東京大学教授として日本近代建築史を研究し、「明治の東京計画」「日本の近代建築 上・下」(岩波書店)、「建築探偵の冒険」(筑摩書房)、「丹下健三」(新建築社)などを出版する。

現在、東京都江戸東京博物館館長、東京大学名誉教授、工学院大学特任教授。

代表作



ラコリーナ近江八幡 草屋根



多治見市 モザイクタイルミュージアム

■ デザインに込められた思い

水戸は何度も訪れているが、その先的那珂は初めてだった。那珂川と久慈川という名高い川に両側を削られた大地の上に広がる田園地帯を午前から案内していただき、夕刻、道の駅の予定地に至り、印象深い光景に出会う。山の見えない平原に夕陽が沈もうとしていた。太陽が、東の太平洋の水平線から出て、西の地平線に入る。まさに「日の立つ国」。

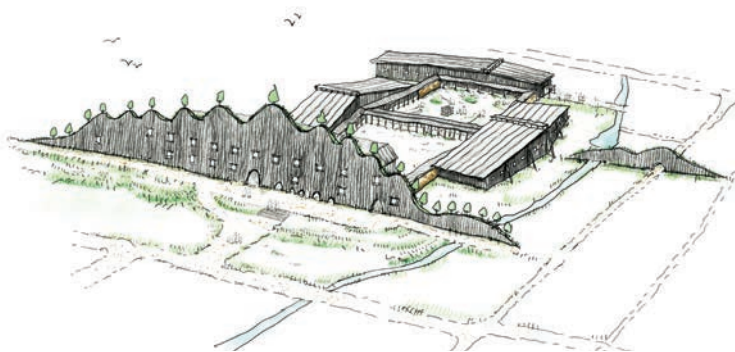
この平坦な地を高速道路で訪れる人がすぐ目に入るように、小さな南向きの山を建築で作ろう。その東から日が出、正面を照らし、西へと入る。

こうして正面の姿は決まった。

正面の背後に広がる平面はどう展開すればいいか。構造体は太陽が育ててくれた木を使おう。環境上もいいと言われ始めているし。構造体の外側には焼杉を張り、内側には漆喰を塗ろう。焼杉の黒と漆喰の白は、意外と周辺の視覚的自然環境を壊さずに済む。パンダ効果。

回りを回廊でつなげば、分棟化した大きな全体が一つのまとまりを持ち、かつ、中庭は、子どもたちの遊びの場や、地域の人たちの集まりにも活用できよう。

かくして、外観と全体の配置が導かれた。



藤森氏の思いが込められた、デザインスケッチ

▶ 今後も道の駅の情報をお伝えしていきます！